

雪靈續記

泉鏡花

青空文庫

機きくわい會かいがおのづから來きました。

今こんど度の旅たびは、一いつたい體たいははじめは、

其そこ處ちで、一あるよう事じを濟すましたあとを、

らうとしたのであります。——

此このれつしや列れつ車しやは、

米まい原ばらで一いつたい體ぶん

分しん身しんして、分わかれて東とう西さいへ馳はしります。

其それがおほゆき大雪おほゆきのために進しん行かうが續つづけられなくなつて、

晚ばん方がた武たけふ

生えき驛えき（越ゑち前ぜん）へ留とまつたのです。強しひて一ひと町ちやう場ばぐらゐは前ぜん

進いん出で來きない事ことはない。が、然さうすると、深しん山ざんの小せう驛えきですか

ら、りよしや旅舎にもしよくれう食料にも、じようかく乗客にたい對するせつび設備がふそく不足で、
きけん危険であるからとの事ことでありました。

ぐわんらい元來——きと歸途にこせん此の線せんをたよつてとうかいだう東海道へおほまは大りをし

ようとしたのは、……じつ實はとちう途中でけつしん決心できが出来たら、たけふ武生へお降り

て許ゆるされない事ことながら、いたどりそこからさと虎杖の里さとに、つたやもとのり蔦屋り（旅

よくわん館）よねのお米たづさんを訪ねいようと言ふ……み見るくつも積るゆき雪なかの中に、

あはゆき淡雪きの消えるやうな、あだあだなのぞみぞみがあつたのです。そのぞみで其の望

をあふ煽るために、も最うふくあ福井あたりからさけ酒さへの飲んだのでありますが、

よ酔ひもしなければ、こころ心もきま定らないのであります。

たゞ唯一や夜、いたづ徒らに、おもひで思出たけふの武生まちの町やどに宿つてもかま構はない。が、

やど宿りつゝ、そこ其處いたどりに虎杖さとの里かなたをみ彼方にこころ視て、あし心もはこ足もとき運べない時

の夢はかなさには尚ほ堪たへられまい、と思おもひなやんで居ゐますうちに――

汽車きしやは着つきました。

目めをつむつて、耳みみを壓おさへて、發はつしや車を待まつのが、三分ぶん、五分ぶん、十分ぶん十五分ぶん――やゝ三十分ぶんす過ぎて、やがて、驛えきいん員いんに其その不通ふつうの通つう達たつを聞きいた時ときは！

雪ゆきが其そのまゝの待まち女郎ぢやうらうに成なつて、手てを取とつて導みちびくやうで、まじ巴ともゑの中なか空ぞらを渡わたる橋はしは、宛さながら然たに玉たまの棧かけはし橋はしかと思おもはれました。人間にんげんは増ぞうちやう長ちやうします。――積せきせつ雪せつのためために汽車きしやが留とまつて難な

儀ぎをすいると言いへば――旅籠はたごは取とらないで、すぐにお米よねさんの許もとへ、然さうだ、行いつて行ゆけなことさうな事ことはない、が、しかし……と、そんな事ことを思おもつて、早はや壁かべも天てんじやう井いも雪ゆきの空そらのやうに成なつた停ステ車エシ

場に、しばらく考へて居ましたが、餘り不躑だと己を制して、
矢張り一旦は宿に着く事にしましたのです。ですから、同列
車の乗客の中で、停車場を離れましたのは、多分私が一
番あとだつたらうと思ひます。

おほゆき
大雪です。

「雪やこんこ、
ゆき

あられ
霰やこんこ。」

おほゆき
大雪です——が、停車場前の茶店では、まだ小兒たち
の、そんな聲が聞えて居ました。其の時は、山の根笹を吹くや
うに、風もさらりと鳴りましたつけ。町へ入るまでに日もとつ
ぷりと暮果てますと、
くれは

「爺ぢいさいのウばい婆ばいさいのウ、

綿わた雪ゆきこゆきが降ふるわいのウ、

あまど 雨こ戸まも小窓こまどもしめさつし。」

と寂さびしい侘わびしい唄うたの聲こゑ——雪ゆきも、小兒こどもが爺ぢい婆ばあに化ばけました。

——風かぜも次し第だいに、ぐわうくと樹きながら山やまを揺ゆりました。

店屋みせさへ最もう戸とが閉しまる。……旅籠屋はたごやも門もんを閉とめました。

家名いへも何なにも構かまはず、いま其家そこも閉しめようとする一軒けんの旅籠屋はたごやへ

駈かけ込みこましたのですから、場ば所しょは町まちの目貫めぬきの向むきへは遠とほいけれど、

鎮守ちんじゆの方ほうへは近ちかかつたのです。

座敷ざしきは二階にかいで、だゞつ廣ひろい、人にん氣きの少すくないさみしい家いへで、夕餉ゆふげ

もさびしうございました。

わかさがれひ
若狹鰈——大すきですが、其が附木のやうに凍つて居ます—
しらすほし
白子魚乾、切干大根の酢、椀はまた白子魚乾に、とろゝ昆布
すひ
の吸もの——しかし、何となく可懐くつて涙ぐまるゝやうでし
た、何故ですか。……

さげ
酒も呼んだが酔ひません。むかしの事を考へると、病苦を救
よ
はれたお米さんに對して、生意氣らしく恥かしい。

りやうて
兩手を炬燵にさして、俯向いて居ました、濡れるやうに涙が
こたつ
出ます。

さつと言ふ吹雪であります。さつと吹くあとを、ぐわうーと鳴
い
る。……次第に家ごと揺るほどに成りましたのに、何と言ふ寂
しだい
寞だか、あの、ひつそりと障子の鳴る音。カタ〜カタ、白
しやうじ
おと
しろ

い魔まが忍しのんで來くる、雪ゆき入に道だうが透す見きする。カタク〜カタク、さ
 ーツ、さーツ、ぐわう〜と吹ふくなかに——見みる〜うちに障しやう
 子じの棧さんがパツ〜と白しろく成なります、雨あま戸どの隙すへ鳥とりの嘴くちばし程ほど吹ふ
 込きこむ雪ゆきです。

「大おほ雪ゆきの降ふる夜よなど、町まちの路みちが絶たえますと、三みつ日かも四よつ日かも私わたし一ひ
 人ひとり——」

三ねん年いぜん以あ前まへに逢あつた時とき、……お米よさんねが言いつたのです。

……………

「路みちの絶たえる。大おほ雪ゆきの夜よ。」

お米よさんねが、ああの虎いた杖どりの里さとの、此この吹ふ雪ゆきに……

「……唯たゞ一ひとり人ひとり。」

わたしは決然として、身ごしらへをしたのであります。

「電報を——」

と言つて、旅宿を出ました。

實はなくなりました父が、其の危篤の時、東京から歸りま

すのに、(タダイマココマデキマシタ)と此の町から發信した

……偶とそれを口實に——時間は遅くはありませんが、目口も

あかない、此の吹雪に、何と言つて外へ出ようと、放火か強盜、

ひとごろしに疑はれはしまいかと危むまでに、さんざん思ひ惑つた

あとです。

ころ柿のやうな髪を結つた霜げた女中が、雑炊でもするの

でせう——土間で大釜の下を焚いて居ました。番頭は帳場

に青い顔をして居ました。が、無論、自分たちが其の使に出ようとは怪我にも言はないのでありました。

二

「何う成るのだらう……とにかくこれは尋常事ぢやない。」
 わたしは幾度となく雪に轉び、風に倒れながら思つたのであります。

「天狗の爲す業だ、——魔の業だ。」
 なに何しろ可恐い大な手が、白い指紋の大渦を巻いて居るのだと思ひました。

いのちとりの吹雪の中に——

最後に倒れたのは一つの雪の丘です。——然うは言つても、小

高い場所に雪が積つたのではありません、粉雪の吹溜りがこん

もりと積つたのを、哄と吹く風が根こそぎに其の吹く方へ吹飛ば

して運ぶのであります。一つ二つの数ではない。波の重るやうな、

幾つも幾つも、颯と吹いて、むら／＼と位置を亂して、八方へ

高く成ります。

私は最う、それまでに、幾度も其の渦にくる／＼と巻かれて、

大な水の輪に、子子蟲が引くりかへるやうな形で、取つては投

げられ、掴んでは倒され、捲き上げては倒されました。

私は——白晝、北海の荒波の上で起る處の此の吹雪の渦

を見た事ことがあります。——一度いちどは、たとへば、敦賀灣つるがわんでありました——繪ゑにかいた雨龍あまりようのぐるぐると輪わを巻まいて、一條ひとすぢ、ゆつたりと尾をを下したに垂たれたやうな形かたちのものが、降りしきり、吹ふつて空くう中ちゆうに薄うす黒くろい列れつを造つくります。

見みて居ゐるうちそに、其ひとの一つひとが、ぱつと消きえるかと思おもふと、忽たちまち、ぱつと、續つゞいて同おなじ形かたちが顯あられます。消きえるのではない、幽かすかに見みえる若わか狭さの岬みさへ矢やの如ごとく白しろく成なつて飛とぶのです。一ひとつ一ひとつが皆みな然さうでした。——吹ふ雪ぎの渦うづは湧わいては飛とび、湧わいては飛とびます。

私わたしの耳みみを打うち、鼻はなを振ねぢつ、いま、其その渦うづが乗のつては飛とび、掠かすめては走はしるんです。

大波おほなみに漂たゞよふ小舟こぶねは、宙天ちうてんに搖ゆ上すらるゝ時ときは、唯波たぎなみばか

り、白き黒き雲の一片をも見ず、奈落に揉落さるゝ時は、海
 底の巖の根なる藻の、紅き碧きをさへ見ると言ひます。

風の一息死ぬ、眞空の一瞬時には、町も、屋根も、軒

下の流も、其の屋根を壓して果しなく十重二十重に高く聳ち、

遙に連る雪の山脈も、旅籠の炬燵も、釜も、釜の下なる火も、

果は虎杖の家、お米さんの薄色の袖、紫陽花、紫の花も……

お米さんの素足さへ、きつぱりと見えました。が、脈を打つて吹

雪が来ると、呼吸は咽んで、目は盲のやうに成るのであります。

最早、最後かと思ふ時に、鎮守の社が目の前にあることに心

着いたのであります。同時に峰の尖つたやうな眞白な杉の大

木を見ました。

雪難之碑のある處——

天狗——魔の手など意識しましたのは、其の樹のせるかも知れません。たゞし此に目標が出来たためか、背に根が生えたやうに成つて、倒れて居る雪の丘の飛移るやうな思ひはなくなりました。

洵は、兩側にまだ家のありました頃は、——中に旅籠も交つて居ます——一面識はなくなつても、同じ汽車に乗つた人たちが、疎にも、それ／＼の二階に籠つて居るらしい、其れこそ親友が附添つて居るやうに、氣丈夫に頼母しかつたのであります。尤も其を心あてに、頼む。——助けて——助けて——と幾度か呼びました。けれども、窓一つ、ちらりと燈火の影の漏

れて答こたふる光ひかりもありませんでした。聞きこえる筈はずもありますまい。

いまは、唯ただお米よねさんと、間あひだに千せん尺じやくの雪ゆきを隔へだつるのみで、一ひ

人死とりにしを待まつ、……寧むしろ目めを瞑ねむるばかりに成なりました。

時ときに不思議ふしぎなものを見みました——底そこひなき雪ゆきの大空おほぞらの、尚なほ其そ

の上うへを、プスリと鑿のみで穿うがつて其その穴あなから落おちこぼれる……大おほきさ

は然さうです……蠟燭らふそくの灯ひの少すこし大おほきいほどな眞まつ蒼さな光ひかりが、ちら

くと雪ゆきを染そめ、染そめて、ちらくと染そめながら、ツツと輝かゞやいて、

其その古杉ふるすぎの梢こずえに來きて留とまりました。其その青あをい火ひは、しかし私わたしの魂たましひ

が最もう藻脱もぬけて、虚空こくうへ飛とんで、倒さかしました。亡なき骸がらを覗のぞいたのかも

知しれませぬ。

が、其その影かげが映さすと、半なかば埋うもれた私わたしの身からだ體たは、ぱつと紫陽花あぢさゐに

包つまれたやうに、青あをく、藍あゐに、群ぐんじやう青あゐに成なりました。

此この山やまの上うへなる峠たうげの茶屋ちややを思おもひ出だす——極ごく暑しよ、病びやう氣きのため、

俣くるまで越こえて、故こき郷やうへ歸かへる道みちすがら、其その茶屋ちややで休やすんだ時ときの事ことで
す。門もんも背戸せども紫陽花あぢさゐで包つまれて居ゐました。——私わたしの顔かほの色いろも同おな

じだつたらうと思おもふ、手ても青あをい。

何なにより、嫌いやな、可おそろし恐かみい雷なりが鳴なつたのです。たゞさへ破われよう

とする心しんぞう臟ちやうに、動悸どうきは、破障子やれしやうじの煽あふるやうで、震ふるへる手てに飲の
む水みづの、水みづより前さきに無むすう數かの蚊めが、目め、口くち、鼻はなへ飛とび込んだのであり

ます。

其その時ときの苦くるしさ。——今いまも。

三

しろこずゑあをひ
 白い梢の青い火は、また中空の渦を映し出す——とぐるを巻
 き、尾を垂れて、海原のそれと同じです。いや、それよりも、
 たうげやねちか
 峠で屋根に近かつた、あの可恐い雲の峰に宛然であります。

こ
 此の上、雷。

おほかみなり
 大雷は雪國の、こんな時に起ります。

しりよく
 死力を籠めて、起上らうとすると、其の渦が、風で、ぐわ
 うと巻いて、捲きながら亂るゝと見れば、計知られぬ高さから
 さつ おほだき
 颯と大瀧を揺落すやうに、泡沫とも、しぶきとも、粉とも、
 はひ
 灰とも、針とも分かず、降りうづ
 降埋める。

「あつ。」

わたしまたふ

私は又倒れました。

あやしび

怪火に

映る、

其の

大瀧の

雪は、

目の前なる、

ツツンと

重い、

おも

おほきやまいたゞき

ひとなだ

大な山の頂から一雪崩れに落ちて来るやうにも見えませんでした。

ひつし

引挫がれた。

くつう

苦痛の

顔の、

醜さを

隠さうと、

裏も表も

同じ雪の、

厚く、

重い、

おも

ぐわいたう

外套の

袖を

被ると、

また

青い

火の影に、

紫陽花の

花に

包まれ

ますやうで、

且つ

白羽

二重の

裏に

薄萌

黄が

すすと

透る

やうでし

た。

ウオ、

、

、

、

！

俄然として

耳を

噛んだのは、

凄く

可恐

い、

且つ

力ある

犬の

聲

が

ぜん

み、

か

か

おそろし

い、

か

ちから

ある

犬の

聲

が

ぜん

み、

か

か

おそろし

い、

且つ

力ある

犬の

聲

が

ぜん

み、

か

か

おそろし

い、

且つ

力ある

犬の

聲

が

ぜん

み、

か

か

おそろし

い、

俄然として

耳を

噛んだのは、

凄く

可恐

い、

且つ

力ある

犬の

聲

が

でありました。

ウオ、、、！

とらうそぶ
虎の嘯くとよりは、龍の吟ずるが如き、
せいれつひそう
凄烈悲壯な聲であり

ます。

ウオ、、、！

みこゑ
三聲を續けて鳴いたと思ふと……雪をかついだ、
ふとたくま
太く逞しい、

しかし瘦せた、
いつとう
一頭の和犬、
いぬ
むく犬の、
みみ
耳の青竹をそいだや

うに立つたのが、
ふゞき
吹雪の瀧を、
うへ
上の峰から、
いつちよくせん
一直線に飛下り

た如く思はれます。
たちまわたり
忽ち私の傍を近々
よこ
と横ぎつて、
さいう
左右に雪

の白泡を、
しらあわ
ぎつと蹴立てて、
あたか
恰も水雷艇の
あらかなみ
荒浪を切るが如

く猛然として進みます。

あと、ものの一町ばかりは、眞白な一條の路が開けました。——雪の渦が十ヲばかりぐるぐると續いて行く。……

此を反對にすると、虎杖の方へ行くのであります。

犬の其の進む方は、まるで違つた道でありました。が、私は夢中で、其のあとに續いたのであります。

路は一面、渺々と白い野原に成りました。

が、大犬の勢は衰へません。——勿論、行くあとにく道

が開けます。渦が續いて行く……

野の中空を、雪の翼を縫つて、あの青い火が、蜿々と螢の

やうに飛んで來ました。

眞正面に、凹字形の大な建ものが、眞白な大軍艦の

やうに朦朧もうろうとして顯あられました。と見みると、怪あやし火びは、何なんと、ツツと尾をを曳ひきつゝ。先さきへ斜なめに飛とんで、其その大屋根おほやねの高たかい棟むねなる避ひら雷いしん針とつたんの尖とつたん端たんに、ぱつと留とまつて、ちらく〜と青あをく輝かきます。

ウオ、ハ、ハ、ハ、

鐵てつづくりの門もんの柱はしらの、やがて平地へいちと同おなじに埋うづまつた眞まん中なかを、犬いぬは山やまを乗のるやうに入はひります。私わたしは坂さかを越こすやうに續つゞきました。

ドンと鳴なつて、犬いぬの頭づつ突つきに、扉とびらが開あいた。

餘あまりの嬉うれしさに、雪ゆきに一度いちど手を支つかへて、鎮ちん守じゆの方ほうを遙えう拜はいしつゝ、建たてものの、戸とを入はひりました。

學がく校かう——中ちう學がく校かうです。

唯ト、犬いぬは廊下らうかを、何處どこへ行いつたか分わかりません。

途端とたんに……

ぎつくと、あの續つづいた渦うづが、一ひとツづゝ數すう萬まんの蛾がの群むらつたやうな、一ひとり人の人ひとの形かたちになつて、縦じう隊たい一いち列れつに入はいつて來きました。雪ゆきで束つかねたやうですが、いづれも演えん習しゆ行かう軍ぐんの装よそして、眞まつ先さきなのは刀たうを取とつて、ぴたりと胸むねにあてて居ゐる。それが長なが靴ぐつを高たかく踏ふんでづかりと入はいる。あとから、背はい囊なう、荷にな銃ひづつしたのを、一いつ隊たい十七にん人にんまで數かぞへました。

うろつく者ものには、傍わき目めも觸ふらず、肅しゆく然ぜんとして廊らう下かを長ながく打うつて、通とほつて、廣ひろい講かう堂だうが、青あ白しろく映うつつて開ひらく、其そこ處ちうへ堂だう々々と入はいつたのです。

「休やすめ——」

……と聲こゑする。

私わたしは雪籠ゆきごもりの許ゆるしを受けようとして、たどくと近づちかきました
が、扉とびらのしまつた中なかの様子やうすを、硝子窓がらすまど越こに、ふと見みて茫然ぼうぜんと
立たちました。

眞まんなか中の卓テエブル子かこを圍いんで、入いり亂みだれつゝ椅子いすに掛かけて、背囊はいなう
も解とかず、銃じうを引ひつけたまゝ、大皿おほざらに装よそつた、握にぎり飯めし、赤せきは
飯ん、煮染にしめをてん／＼に取とつて居ゐます。

頭かしらを振ふり、足あしぶみをするのなぞ見みえますけれども、聲こゑは籠ごもつて
聞きえませこせん。

——わあ——

と罵のゝしるか、笑わらふか、一ひとつ大おほ聲こゑが響ひびいたと思おもふと、あながの長靴ぐつ

なのが、つかくと進んで、半月形の講壇に上つて、ツと身を
 一方に開くと、一人、眞すぐに進んで、正面の黒板へ
 白墨を手にして、何事をか記すのです、——勿論、武裝の
 まゝでありました。

何にも、黒板へ顯れません。

續いて一人、また同じ事をしました。

が、何にも黒板へ顯れません。

十六人が十六人、同じやうなことをした。最後に、肩と頭と一
 團に成つたと思ふと——其の隊長と思ふのが、衝と面を背
 けました時——苛つやうに、自棄のやうに、てん／＼に、
 齊に白墨を投げました。雪が群つて散るやうです。

黒板は一面眞白な雪に變りました。

此の猛犬は、——土地ではまだ、深山にかくれて活きて居る事を信ぜられて居ます——雪中行軍に擬して、中の河内を柳ヶ瀬へ抜けようとした冒険に、教授が二人、某中學生が十五人、無慙にも凍死をしたのでした。——七年前——雪難之碑は其の記念ださうであります。

——其の時、豫て校庭に養はれて、嚮導に立つた犬の、恥ぢて自ら殺したとも言ひ、然らずと言ふのが——こゝに顯れたのであります。

一行が遭難の日は、學校に例として、食饌を備へるさうです。丁度其の夜に當つたのです。が、同じ月、同じ夜の

其の命日は、月が晴れても、附近の町は、宵から戸を閉ぢるさ
うです、眞白な十七人が縦横に町を通るからだと言ひます—
—後で此を聞きました。

わたしねむ
私は眠るやうに、學校の廊下に倒れて居ました。

よくさうてう
翌早朝、小使部屋の爐の焚火に救はれて蘇生つたのであり

ます。が、いづれにも、然も、中にも恐縮をしましたのは、

汽車の厄に逢つた一人として、驛員、殊に驛長さんの御立
會に成つた事でありました。

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十一」岩波書店

1941（昭和16）年9月30日第1刷発行

1975（昭和50）年7月2日第2刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2005年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪靈續記

泉鏡花

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>